Little Dorrit における虚構の構造[1]

玉　井　史　絵

I　虚構の牢獄

Monroe Engel は，「もし，*Little Dorrit* の主要なテーマを牢獄だとするならば，あまり一般的ではないが，より複雑でより意味があるとさえ言えるテーマは，現実と幻想の曖昧な区別である[2]」と述べている．しかし，これら二つのテーマは，互いに密接に関わり合っている．牢獄は，人間を閉じ込める壁としての機能と同時に，外界の現実から囚人の内面の幻想世界を守る砦としての機能を併せ持っている．外界と牢獄の対立の図式は，第 I 部第 1 章，'Sun and Shadow' において既に明確である．Marseilles の街は灼熱の太陽のもとにある．そこではすべての事物が凝視し，凝視される緊張関係にあり，凝視する習慣が 'universal' なものとすらなっている．そして，人々は凝視を避けるために窓を閉ざす．一方，Blandois と Cavalletto がいる牢獄は，外界から完全に遮断された空間である．太陽は決して，牢獄の内部まではとどかない．その閉ざされた空間の中で，Blandois は Cavalletto にむかって，自らの犯した殺人について語り始める．Dramatic monologue を思わせるような語りの中で，事実がいつしか虚構となっていく．殺人という犯罪が，彼の歪んだ精神によって歪曲され，正当化されていくのである．彼は 'gentleman' としての自己の虚像を作り上げ，Cavalletto も彼に対する恐怖から，敢えて異議を唱えようとはしない．このようにして，牢獄の世界が形成されていく．それは囚人達が外界の stare から隔絶され，自らの幻想や妄想のおもむくままに，虚構を作り上げる世界なのである．William Dorrit は，

Marshalsea 監獄の中に 'a dull relief' を見出し，「彼を閉じ込めた錠と鍵が，多くの厄介な問題を閉め出してくれた[3]」と感じる．Mrs. Clennam は Jeremiah にむかって，「もしも，私が長い間この部屋に閉じ籠もっていることに何か報いがあるとするならば，それは，私が心地よい変化のすべてから閉め出されていると同時に，知りたくもないようなことからも閉め出されているということなのです」(p. 178) と言う．これらの人物は，自らの幻想の世界に外界の現実が侵入するのを頑なに拒み続ける．幻想の世界の囚人が現実と接触する瞬間が最も鮮やかに描かれているのは，Mrs. Clennam が歩く力を再び得て，長年の彼女の牢獄であった屋敷を飛び出した場面であろう．

> Made giddy by the turbulent irruption of this multitude of staring faces into her cell of years, by the confusing sensation of being in the air and the yet more confusing sensation of being a-foot, by the unexpected changes in half-remembered objects, and the want of likeness between the controllable pictures her imagination had often drawn of the life from which she was secluded, and the overwhelming rush of the reality, she held her way as if she were environed by distracting thoughts, rather than by external humanity and observation. (p. 766)

彼女が牢獄を出たとたんに，外界の 'staring faces' に曝されるという事実は，小説の冒頭の箇所とも呼応している．牢獄は彼女にとって，imagination による支配の可能な世界であり，固有の秩序を保った，静止した世界であった．だが，彼女の想像力が描いてきた世界は，外界の reality によって壊されていく．この後の屋敷の崩壊は，彼女の幻想の消滅を象徴する出来事である．

Little Dorrit において，ほとんどすべての登場人物は，夢や幻想，想像，妄想，幻覚の描く，虚構の世界の中で生きている．そして，その意味において，彼らはすべて牢獄の囚人である．囚人は牢獄からの解放を願う．彼らは意識的，あるいは無意識的に，虚構の世界から現実の世界への道を模索する

のである．ヒロイン Little Dorrit もまた，例外ではない．

Little Dorrit の性格分析に関しては，これまで，彼女の善性が強調されるあまりに，彼女自身の内面に潜む矛盾や迷い，葛藤といったものが，見過ごされてきたように思う．[4] 彼女の持つ絶対的な善性は否定できないが，彼女の中に，人間的な成長の軌跡を見出すことも可能ではないだろうか．「Marshalsea の子供」として生れた彼女は，常に牢獄という虚構の支配する世界のもたらす，精神的な悪影響の危険にさらされている．彼女は様々な試練を経て，自らを取り巻く虚構を認識し，その中に生きることの虚しさを知って，現実に根ざした生き方を選択していくのである．本稿では，特に父 William Dorrit との関係に注目しながら，Little Dorrit が虚構からの解放を模索する，成長の過程を分析していきたい．

II　Marshalsea の虚構

Marshalsea 監獄に初めて足を踏み入れた時の Mr. Dorrit はまだ若く，そのような場所に入れられたことに対するとまどいを，隠すことができないでいる．しかし，牢獄はいつしか，彼にとって安住の地となり，彼は「Marshalsea の父」として，その頂点に君臨するようになる．彼は「接見」と称して他の囚人達を自室に招き，「心付」と称して彼らから金を受け取る．彼は自分が王候貴族であるかのような幻想を抱き，その幻想の中で生きている．この幻想は Mr. Dorrit 一人だけのものではない．Marshalsea の多くの人々が実際に彼を「父」として崇め敬っている．監守は新しく入ってきた囚人達に、フランス人よりもフランス語をよく知っていて，イタリア語も話せる紳士だといって，Mr. Dorrit を紹介する．Mr. Plornish は，Arthur に Mr. Dorrit のことを尋ねられた時，まず「あの礼儀作法といったら！あの上品さといったら！」(p. 133) と感嘆の声をあげる．F. R. Leavis は，非現実は「共同の産物」(collaborative creation) であると言っている．[5] Marshalsea の虚構は，Marshalsea の人々が協調して作り上げたものである．

Little Dorrit は，この Mr. Dorrit を中心とする Marshalsea の虚構のただ中に生れ育った．彼女の精神は当然，その影響下にあると考えられる．Leavis は「彼女は完全に real であり，他の人々の reality の試金石である」と言う．彼はまた続けて，次のように述べている．

> The characteristic manifests itself in her power to be, for her father and brother and sister, the never-failing providence, the vital core of sincerity, the conscience, the courage of moral percipience, the saving realism, that preserves for them the necessary bare minimum of the real beneath the fantastic play of snobberies, pretences and self-deceptions that constitutes genteel life in the Marshalsea.[6]

しかし，Little Dorrit が Leavis の言うように，彼女の家族の「貴族気取や見せかけ，自己欺瞞の空想の演技」に対抗していたかということに関しては，第Ⅰ部の段階では，疑問をはさむ余地があるように思う．Little Dorrit には，父や兄弟の空想を共有していると思われる一面があるからである．そのような一面は，父親に対する彼女の「無邪気な誇り」に見ることができる．Iron Bridge の上で Arthur と初めて二人きりで会話をかわした時，Little Dorrit は次のように言う．

> "All that he said was quite true. It all happened just as he related it. He is very much respected. Everybody who comes in, is glad to know him. He is more courted than any one else. He is far more thought of than the Marshal is." (p. 92)

彼女の誇りは心からのものであり，嘘偽りはない．語り手は「もし，誇りというものが無邪気になり得るならば，父親を自慢する時の Little Dorrit は，無邪気であった」(p. 92) と述べている．語り手はまた，「彼のまわりを偽りの明るさで照らす光は，いかに真実であったことか」(p. 93) とも言って

いる．けれども，彼女の心がいかに真実であったとしても，父を照らすことができるのは偽りの光でしかない．彼の真実の姿は，哀れな破産者に過ぎない．それでもなお，Little Dorrit が無邪気に父を誇ることができるのは，彼女自身が，「Marshalsea の父」という彼の虚像を信じているからなのである．Nicholas H. Morgan は，Marshalsea の父と娘の相互に精神的な依存関係が存在することを指摘し，Little Dorrit—William の関係と，Cavalletto—Blandois の関係との間に，類似性を見出している．[7] 一方の幻想が，他方の協調のもとに成立しているという点において，二つの牢獄内の人間関係は似通っている．Little Dorrit の協力があって初めて，William の虚構世界は完結する．彼女も Marshalsea の虚構を支える人々の一員とみなすことができるのである．

Marshalsea の世界はその内部で一種の調和を保ち，ユートピア的な空間を作り出している．すべてのものが常に変化し，混沌とした世の中にあって，牢獄は静止し，安定した空間である．[8] そこは外界に適応できない人々にとって，絶好の避難場所となる．飲んだくれの医者は，Little Dorrit が生れた時，William にむかって次のように語る．

> "Elsewhere, people are restless, worried, hurried about, anxious respecting one thing, anxious respecting another. Nothing of the kind here, sir. We have done all that — we know the worst of it; we have got to the bottom, we can't fall, and what have we found? Peace. That's the word for it. Peace." (p. 63)

また，Little Dorrit は Arthur に，Marshalsea とそこに住む人々について，次のように話す．

> "People are not bad because they come there. I have known numbers of good, persevering, honest people, come there through misfortune.

> They are almost all kind-hearted to one another. And it would be ungrateful indeed in me, to forget that I have had many quiet, comfortable hours there; that I had an excellent friend there when I was quite a baby, who was very fond of me; that I have been taught there, and have worked there, and have slept soundly there." (p. 93)

A. O. J. Cockshut は，この平和，自由，親切さこそが，最も重大な危険性を孕んだものであり，William の道徳的堕落の最大の要因であることを指摘する.[9] しかし，それでも，Little Dorrit は父のために，牢獄の偽りの調和を守ろうとする．Morgan は，牢獄の囚人は変わることのない日常に執着すると述べ，Little Dorrit の心理にも不変性への固執が見られると言う.[10] 安全な牢獄から未知の世界へ出ていくことに対して，Little Dorrit は大きな不安を抱いている．彼女は，Arthur が William の釈放を取り計ろうとした時，彼女には珍しくはっきりと彼に反対するが，それは安定した牢獄のユートピア的な空間が破壊されることへの，秘かな恐れの表れである．

しかし，牢獄の擬似ユートピアも，外部の現実に触れた時，不協和音を奏で始める．Mr. Plornish は先に引用した言葉の後で，「Marshalsea で落ちぶれてしまった紳士っていうわけですよ」(p. 133) と続ける．語り手は彼の口調には，「本当は憐れんだり軽蔑しなければならない者に対する，奇妙な尊敬の念」(p. 133) があったと言っている．Plornish は，一度は監獄に入ったことがあるとはいえ，この時は既に外部の人間である．外部から Marshalsea の内部を眺めた時，憐れな破産者という Mr. Dorrit の実像が，彼の目の前にちらつくのである．Little Dorrit も Marshalsea の内と外を行き来している．彼女もまた，完全に Marshalsea の虚構を信じているというわけではない．そのことは，外界の人間である Arthur が初めて Marshalsea を訪れた時の，彼女の態度からもわかる．彼女は父を半ば誇り，半ば恥じている．殊に，William が Arthur にむかって暗に「心付」を要求した時，彼女

の恥じらいは頂点に達する．彼女は父親の実像と虚像を見分ける目を持っている．Marshalsea の世界の虚構性を，彼女は無意識のうちに感じているのである．

しかし，Little Dorrit はやがて，Marshalsea を外界から隔てている壁の存在を，はっきりと意識するようになる．そして徐々に，牢獄の内部の世界の虚構性を認識していく．14章，彼女は生れて初めて Marshalsea の壁の外に閉め出され，外界の現実と対峙するのである．彼女は「とても大きく，不毛で，荒涼とした」(p. 162) 夜の London の街を Maggy と二人でさまよい，最下層の路上生活者達の悲惨さを目の当りにする．この経験は Little Dorrit にとって，initiation としての役割を果たしている．監獄という閉ざされた空間の外側に，もう一つの別世界があることを彼女は知ったのである．

18章で Little Dorrit は，Young John からの求婚を拒絶する．John との結婚は，彼女を外界の現実から完全に囲い込もうとするものであった．John は，「Marshalsea の子供」である Little Dorrit と，その監守の息子である自分との結婚には，完全な適合性があると考える．そして次のように想像する．

> With the world shut out (except that part of it which would be shut in); with its troubles and disturbances only known to them by hearsay, as they would be described by the pilgrims tarrying with them on their way to the Insolvent Shrine; with the Arbour above, and the Lodge below; they would glide down the stream of time, in pastoral domestic happiness. (p.206)

Little Dorrit が John の求婚を拒絶したのは，無論，Arthur への秘められた思いがあったからである．しかし，それは同時に，John が想像する現実から隔離された空間の中で生きることに対する，拒絶でもあった．彼女は彼に，「門の外に出てしまえば，私は誰にも守ってもらえないし，独りぼっちなの

だということを，あなたに特に覚えておいてほしいの」(p. 212) と言っている．求婚を断るには不可解な言葉だが，この言葉の背後には，彼女自身もおそらくは意識していないであろう心理がはたらいている．そしてそれは，Marshalsea の虚構の世界からの解放の願望なのである．

Little Dorrit の求婚の拒絶は，思わぬ事態を招くことになる．Young John の父である監守 Mr. Chivery の不興をかい，それが引き金となって Mr. Dorrit は極度の絶望感に襲われる．Mr. Dorrit が一瞬だけ，現実に目覚めるのである．Little Dorrit の虚構の世界の否定が，間接的に Mr. Dorrit の現実との対峙の原因となっていることに，ここで特に注目しておきたい．彼女の否定の意志が，「共同の産物」である非現実の世界の調和を乱し，そこに現実が侵入するきっかけとなったのである．Mr. Dorrit の架空の gentility は消え去り，彼は「施し物と残飯で生きている哀れな囚人」(p. 221) に過ぎなくなる．F. R. Leavis は，この時の Little Dorrit が，完全な無私の愛の力によって父の現実の認識を助けていると言っている．[11] しかし，これはむしろ逆のように思われる．Little Dorrit は，父にとって現実を垣間見ることがどれほど残酷なことであるかを知り，彼が虚構の世界に戻っていくことを助けるのである．Mr. Dorrit は自分を卑下する一方で，何とか虚構の自画像を取り繕おうと努力する．彼は「誰がここで一番偉い人か聞いてごらん．みんなは，それはお前のお父さんだというに決まっている」(p, 222) と娘に語りかける．「時には自慢し，時には絶望しながら」(p. 222)，彼の心は，自己の虚像と実像との間で揺れ動いている．Little Dorrit が加担するのは，父の虚像の自己認識の方である．彼女は「たとえ，お父さんが好運の申し子で，全世界がお父さんを認めていたとしても，これ以上尊敬することはできないでしょう」(p. 223) と言って父を慰める．そして，彼が再び，「Marshalsea の父」としての落ち着きを取り戻した時，彼女は新しい服の話をして彼を喜ばせている．一晩父の傍らに付き添った後，屋根裏の自分の部屋に戻った Little Dorrit は，窓から外の景色を眺める．彼女は「この時

ほど（Marshalsea の壁の）忍び返しが鋭く，残酷に見え，鉄格子が重く見え，牢獄の空間が陰鬱で，狭苦しく見えたことはなかった」（p. 225）と感じる．Mr. Dorrit は曲がりなりにも心の平静を回復することができた．けれども，空想の世界に生きる虚しさを感じた Little Dorrit にとって，牢獄の調和は完全に失われたものとなってしまった．彼女が無邪気に父を誇ることは，もはやできないのである．

20章，Little Dorrit は Fanny に連れられて Merdle 邸へ行った後，彼女から「あなたがおとなしくあそこに引き籠もっている間，私は外に出て社会の中で動き回っているの」（p. 239）と言われる．読者の目には理不尽に映る Fanny の言葉だが，Little Dorrit の目には反論することができない事実と映る．父を覆う Marshalsea の壁の影が自分にも及んでいると感じ，「Fanny の言うことも尤もだわ」（p. 240）とつぶやく．彼女は，牢獄の内と外を隔てる壁を強く意識し，自分もまた，父と同じく，内側の人間ではないかと考え始めるのである．

22章，再び Iron Bridge で出会った Arthur に，Little Dorrit は，「川や，こんなに大きな空や，こんなにたくさんの物が，変化して動いているのを見てから，帰ってお父さんがあの同じ窮屈な場所にいるのを見るのは，残酷な気がする」（p. 253）と話す．彼女の心中では，自由と生命の息吹に満ち溢れた外界への憧れがある一方で，外界から隔絶されて空虚な日々を送る父への同情もある．両者の葛藤が，この言葉によく表されている．Little Dorrit は，Marshalsea を「家」と呼び，「私の場所はあそこにあるのです．・・・私があそこで少しでも役に立てる時にここにいるのは，いけないことなのです．さようなら．」（p. 256）と言って Arthur に別れを告げる．牢獄でしか生きることのできない父を守るためには，彼女もまた，牢獄で生きていくしかない．徒に外界の現実を知るよりも，牢獄の虚構の中で生きていく方が，父にとっても，また彼女自身にとっても，幸せなのである．Pancks が Dorrit 一家の家系を調べて，莫大な遺産の相続人であることを突き止めようと

手を尽くしている時に，Little Dorrit が誰とも会いたがらないのは，単なる「恋わずらい」のためだけではない．外との繋がりを断つことによって危うく保たれている Marshalsea の調和が乱されることを，彼女は恐れていたのである．だが，変化は否応なしにやってくる．Dorrit 一家は，Dorsetshire の Dorrit 家の末裔であることが判明し，Marshalsea 監獄から釈放されて，「外」の世界へ出ていくことになる．

Ⅲ　上流社会の虚構

Arthur から Mr. Dorrit の遺産相続の知らせを聞いた時，Little Dorrit は一瞬，「苦しみの表情」(p. 403) を浮かべる．父が釈放されて，Marshalsea の世界から出て行かざるを得なくなることを，Little Dorrit は最も恐れていたからである．だが，Mr. Dorrit が金持ちになるということは，彼が長年 Marshalsea の中で培ってきた gentleman としての空想の世界が，実現することを意味する．Little Dorrit は Arthur と共に監獄にいる父に朗報を告げた後，「暗い雲のかき消されたお父さんの姿を見ることができる」(p. 406) と言って喜びを表す．

けれども，Marshalsea からの解放は，牢獄からの解放ではなかった．Marshalsea も，一家が新しくその一員となった上流社会も，人々が現実を拒否し，虚構の世界を作り上げようとする精神構造において，何ら変わりはない．上流社会もやはり，外界から隔絶されて虚構の上に成り立つ世界なのである．上流社会の虚構がいかなるものであるかは，Mrs. General の人生哲学によって知ることができる．それは世の中の矛盾や悲惨さのすべてを覆い隠し，ただひたすら「うわべを磨く」ということである．彼女の教えによれば「不愉快なものは見るべきではなく・・・本当に洗練された心というものは完全に上品で，平静で，心地よいもの以外には，何も知らないふりをしなければならない」(p. 463) のである．Dorrit 家の一行は彼女の教えどおり，貧困に苦しむイタリア民衆を素通りして，Martigny から Venice，Venice

から Rome へと旅をする．

上流社会の虚構も Marshalsea と同じく「共同の産物」であり，人々は協調して擬似ユートピアを守ろうとする．実際には「詐欺師で大泥棒」(p. 691) に過ぎない Mr. Merdle を，人々は時代の寵児として崇め奉る．彼はいつもだぶだぶの袖の上着を着ていて，彼と握手をした Fanny は，まるで Guy Fawkes のようだと感じるが，これは彼の実体のない人間像をよく表している．「ひびが大きければ大きいだけ，ニスもたっぷり塗る」(p. 439) というのが，Mrs. General の哲学である．実体が乏しいものであればある程，虚構も強固でなければならないのである．Dorrit 一家の Marshalsea での惨めな過去は，この上流階級の世界に侵入させてはならない現実となる．彼らが上流社会において，その調和を乱さずに受け入れてもらうためには，自分達の不愉快な過去を抹消し，「汚れのない」新しい人間として再出発しなければならない．そして，そのために，彼らは絶えず，過去の現実と現在の虚構との間で，精神的な緊張状態を強いられることになる．

Little Dorrit は，はじめのうちこそ，父の眼前に「視界を暗くし，影を投げかけるような惨めな帳」(p. 444) がないのを見て満足している．しかし，彼女は間もなく，Marshalsea の壁の影は，「新しい形を取っているが，あの古い，悲しい影なのだ」(p. 463) と気付くようになる．「何もかもがうわべと虚飾と見せかけで，実体のない」(p. 490) ような世界の中で，Little Dorrit はもはや，家族の虚構を共有することはできない．何故なら，彼女は虚構の本質を見抜いてしまっているからである．第Ⅱ部を特徴づけているのは，この Little Dorrit の透徹した眼差しである．Mrs. General がどれほどたっぷりとニスを塗ろうとも，世の中のひびは覆い隠すことはできない．Little Dorrit の関心は外界へと向けられていく．彼女にとっては，一家が素通りしたイタリア民衆こそが唯一の現実であり，一家が打ち消そうとした Marshalsea の過去だけが，唯一実体を持つものなのである．彼女は虚構の世界からの疎外感を深めていく．家族が「夜を昼に変える」(p. 453) よう

な生活をしている間，彼女は独り思索に耽る．彼女は Marshalsea にいた時のように，家族から必要とされることもない．孤独の中で彼女の心は Venice の非現実を離れ，彼女にとって「決して変わることのない現実」(p. 454) である Marshalsea へと戻っていく．

一方，William は無意識下で過去の影に怯えながらも，上流社会に溶け込もうと懸命に努力をする．Marshalsea の記憶が riches の世界に侵入することを，彼は極度に恐れているため，彼の精神は常に不安定な状態にある．彼は 5 章でただ一度だけ，Little Dorrit の前で過去のことを口に出し，自己の内面の不安定さを露呈してしまう．しかし，それ以後，彼は決して，自己の弱点を人前に出そうとはしない．無意識下で過去の記憶を抑圧すればするほど，意識の上では虚構の世界に固執するのである．Mr. Dorrit の虚構への執着は，Fanny の婚約，結婚という一連の出来事によって，一家が上流社会の住人として正式に認められるようになるにつれて，さらに強められていく．この過程の中で，Little Dorrit と父との距離は，徐々に拡がっていく．彼女は父の内面の孤独を見抜いているが，Mr. Dorrit は彼女を受け入れようとしない．そして，Little Dorrit が父の心に占めていた地位は，上流社会の虚構の化身である Mrs. General が占めるようになっていく．Fanny の結婚式の後，Mr. Dorrit は Little Dorrit にも結婚をすすめる．その時，彼女は一瞬，「お父さんは，お金持ちになって，私を後妻さんと置き換えようと考えている今となっては，簡単に私のことをあきらめられるのではないか」(p. 591) という疑問を抱きかける．見せかけと虚飾の世界の中に，彼女の入り込む余地は，もはやなくなってしまうのである．

イギリスに戻った Mr. Dorrit は，Mr. Merdle の歓待を受けて得意の絶頂となる．だが一方で，Young John や Flora といった過去との関わりを持つ人々と出会うことによって，過去が露見してしまうのではないかという恐怖心も高まっていく．Mr. Dorrit はそれを打ち消すかのように，ますます虚構の世界に深入りしていく．彼は Mrs. General との再婚という将来を想定し

た，壮大な「空中楼閣」を思い描き，夢見心地で Rome に帰っていく．しかし，その「空中楼閣」も，結局は抑圧された過去の記憶を消すことはできない．Mrs. Merdle の晩餐会の席上，彼の「空中楼閣」は敢えなく崩壊し，Marshalsea の記憶が蘇る．彼は晩餐会の席上の人々に対して，Marshalsea に来たことを歓迎する演説を述べた後，病の床に臥してしまう．

Mr. Dorrit はその後，最期を迎えるまでのわずかな期間に，少しづつ本来の自己に立ち返っていく．上流階級の見せかけからようやく解放された彼の心は，再び Marshalsea へと戻っていく．そして束の間の間，彼は娘との心の交流を楽しむ．彼の死が近づくにつれて「静かに静かに，大いなる空中楼閣の設計図の線が一本一本消えていき・・・静かに静かに，監獄の鉄格子と，壁の上のジグザグの忍び返しの痕跡が消えていった」(p. 631) と語り手は語る．Little Dorrit は父の死に顔に，「彼女が今まで見たこともないぐらいに若々しく，彼女自身にも似た顔」(p. 631) を見出す．この時の彼の姿こそは，彼女が長い間見たいと望んでいた，「暗い雲のかき消されたお父さんの姿」であった．死の瞬間になって初めて，William の精神は真に虚構の牢獄から解放されたのである．

父の死後，Little Dorrit は，元の貧しい姿となって Marshalsea の Arthur を訪ねる．兄から一番やりたいことをするようにと認められた彼女は，真っ先に上流階級の虚飾を捨て去るのである．そしてその後，もう一つの「空中楼閣」であった Mr. Merdle の破滅によって，彼女は文字どおりの一文無しになっていたことが判明する．しかし，これは彼女には大きな福音であった．このことによって彼女は，病を経て，真に自己の求めるものが何であるかを知った Arthur に，受け入れてもらえるようになるからである．彼ら二人は結婚し，Marshalsea を出て「騒々しい街中」(p. 802) という現実の世界に降りていく場面で，この小説は終わりを告げる．

Ⅳ 虚構から現実へ

Little Dorrit の精神的成長の支柱となっているのは，Arthur である．Little Dorrit と Arthur は，常に相互に影響を与え合いながら成長を遂げていくのであるが，ここではまず，Arthur が Little Dorrit に対して与えた影響から見ていきたい．既に見てきたとおり，彼女は Arthur と出会うことによって初めて，Marshalsea の外の世界を意識するようになった．外界の人間である Arthur が，Marshalsea の内部に入り込んでくることによって，牢獄の偽りの調和が乱され，彼女の目が外界に向けられるようになったのである．Arthur は絶えず，彼女と Dorrit 一家の Marshalsea からの解放を試みる．彼は Little Dorrit の強い反対にもかかわらず，Circumlocution Office に出向いて William の借金の原因を突き止めようとし，それが不可能だと知ってからは，Tip の釈放に力を尽くす．また，Pancks による Dorrit 家の家系調査を影で支援するのも Arthur である．Arthur のこれら一連の行為は，彼自身の罪の意識に基づいている．彼は，Dorrit 家の没落に Clennam 家が関与しているのではないかという観念に，悩まされていたのである．しかし，動機が何であれ，結果的に Arthur は，Little Dorrit を外界へと導く導き手となっている．そして，Little Dorrit は，Arthur を唯一の心の支えとして，外の世界への第一歩を踏み出す．14章で彼女は，Arthur の部屋の明かりを「遠くの星」(p. 163) のように感じて彼の下宿を訪ね，門限に間に合わず，この後，Marshalsea の外での初めての一夜を過ごすのである．彼女が外界への恐怖や変化への恐れを乗り越えようとする時，Arthur はいつも彼女の精神的な支えとなっているのである．その意味において，第Ⅰ部の最終章で Dorrit 一家が Marshalsea 監獄から釈放される場面は，象徴的である．Fanny は Little Dorrit に，みすぼらしい古い服を脱ぎ捨てて新しい服を着るようにと懇願するが，彼女にはそれができない．彼女は出発の間際になって自室で着換えようとするが，そのまま気を失って倒れてしまう．そこへ

Arthur がやってきて彼女を抱き上げ，Marshalsea から外へ連れ出す．Little Dorrit は，Arthur の助けを得て初めて，変化を受け入れることができるようになるのである．

次に，Little Dorrit が Arthur に対して与えた影響を見てみたい．Arthur は「夢想家」として描かれている．しかし，Dickens は彼が「夢想家」であることに関しては，肯定的な意義を見出している．Arthur が幼少年時代に母から受けた冷徹な教育にもかかわらず，「優しく善であるものすべて」(p. 158) に対する信仰を失わなかったのは，Flora へのロマンチックな夢のおかげだった．現実が人々にとって，時には耐え難いほどに過酷なものである限り，虚構の世界への逃避も必要とされるのである．けれども，彼が Flora に対して抱いていた夢は，現実の Flora と再会することによって，無残にも打ち砕かれてしまう．彼のイギリスへの帰還は，逃れようのない現実世界への帰還でもあった．彼は「思い出の中の辛く，厳しかったことすべては現実のままである」(p. 157) ことを認識する．この現実認識の直後に，窓の明かりに導かれた Little Dorrit がやってくる場面は，物語の結末を暗示しているといってよい．夢を失い，現実と向き合わざるをえなくなった時，Little Dorrit が唯一の希望として残されるのである．だが，彼がそのことを真に理解するのは，ずっと後のことである．

Arthur の Pet Meagles に対するはかない恋は，彼が依然として，少年時代の夢想の世界から抜けきっていないことを示している．彼は母との不和や，罪の意識といったものに絶えず悩まされ続け，何事に対しても積極的な行動をとることができない．そのため，Pet への思いを断たれた後，彼は次第に自己破壊的な衝動へと駆り立てられていくことになる．Mr. Merdle の自殺によって破産に追い込まれた彼は，自ら進んで Marshalsea に入る．彼は人との交わりを避け，食物さえも拒絶する．そして彼の自己破壊の衝動が頂点に達した時，Little Dorrit が現れる．

第 I 部で Arthur が Little Dorrit の導き手となっていたのとは対照的に，

第Ⅱ部では，Little Dorrit が Arthur の導き手となって，Marshalsea 監獄から外の世界へと旅立っていく.[12] 彼らが降りていく現実世界では「騒々しい人々，欲深い人々，傲慢な人々，つむじ曲がりの人々，虚栄心の強い人々がせかせかし，苛立ちながら，いつもの喧騒を醸し出している.」(p. 802) その光景は，かつてLittle Dorrit が見た Covent Garden の昼と夜の情景や，イタリアの貧しい村々の風景とも重なり合う．そこには秩序もなければ調和もない．しかし，彼女は混沌とした現実をあるがままに受け入れ，静かに，恐れず，夫を導いてそのただ中へと入っていく．そして，そのような姿の中に読者は，「Marshalsea の子供」として生れた彼女の確かな成長の跡を見ることができるのである．

注

1 本稿は1992年6月6日，同志社大学にて開催されたディケンズ・フェローシップ日本支部大会における研究発表の原稿をもとに，加筆，修正したものである．

2 Monroe Engel, *The Maturity of Dickens* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1959), p. 126–27.

3 Charles Dickens, *Little Dorrit*, ed. Harvey Peter Sucksmith ("The Clarendon Dickens"; Oxford: Clarendon Press, 1979), p. 63. 以下，作品中の引用はすべてこの版により，括弧内に頁数を記した．

4 Lionel Trilling は Little Dorrit の性質をアレゴリカルなレベルでとらえ，社会における悪と対比させて「汚れのない善」(untinctured goodness)であるとしている．(Lionel Trilling, 'Introduction' to the Oxford Illustrated Edition of *Little Dorrit* [Oxford: Oxford University Press, 1953], p. xv.) また，J. Hillis Miller は，彼女を「神聖な善の化身」(a human incarnation of divine goodness) としてとらえている．(J. Hillis Miller, *Charles Dickens, The World of His Novels* [Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1958], p. 246).

5 Cf., F. R. and Q. D. Leavis, *Dickens the Novelist* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1972). pp. 334–35.

6 Leavis, p. 298.

7 Cf., Nicholas H. Morgan, *Secret Journeys:Theory and Practice in Reading Dickens* (Rutherford: Fairleigh Dickinson University Press, 1992), p. 93.

8 Cf., Morgan, p. 94.

9 Cf., A. O. J. Cockshut, *The Imagination of Charles Dickens* (London: Collins, 1961), p. 39.

10 Cf., Morgan, p. 94.

11 Cf., Leavis, p. 327.

12 第Ⅰ部と第Ⅱ部の対照構造については Iain Crawford, "'Machinery in Motion': Time in *Little Dorrit*," *The Dickensian* (Spring, 1988), p.33 に詳しい.